

「威力」をまざまざと

あくまで「庶民の味方」に



山本亦由氏

水俣病患者家庭互助会長

山本 亦由氏(笑)

る。発生当時、新聞はいっせいにこの問題を取り上げ、それと同時に水俣病は大きな社会問題となっていた。これとともに私たちが平凡な漁民もいつか新聞を身近なものに感じるようになった。

手足がしびれ、口がきけなくなる恐ろしい奇病。あのいまわしい水俣病が私たちの平和な漁村を襲ってからもつ十二年の歳月が流れ

さ」を改めて知った。
その後、政治の厚いカベの前で、原因究明がウヤムヤにされていくにつれ、新聞の報道もまた見られなくなった。ニュースを追う新聞にとつて、水俣病はもはやニュースではなくなったのかもしれない。
ところが昨年末ごろから新潟県阿賀野川流域で「第二の水俣病」が発生した。そして水俣病問題が再びクローズアップされた。もし新聞が徹底的に休むことなく水俣病問題を追及してしてくれたら、「第二の水俣病」は発生しなかったのではないか。

だが新しい事態の到来と同時に、新聞は力強くキャンペーンを再開してくれた。船日が二十三回にわたつて連載した「水俣病は叫ぶ」がどれだけ追いつめられた私たち患者を励ましてくれたことか。そして厚生省の「公害認定近し」で始まった各新聞の報道。これらがわが国初の公害認定に大きな力となったと信じている。

数多い新聞の報道の中には悪意を感じられるものや、誤ったものもあり、私たちの活動に悪影響を及ぼした面もないではない。その中であつて昨日はさすがに地元紙らしく、私たち患者の立ち場、地域社会の発展を考慮した総合的な観点から、より客観的に問題を提起し、すると「さ」の中にも、思いやりの姿勢を読みとった。

水俣病問題はまだ解決していない。補償交渉といつむつかしい問題が残っている。私たちはあくまでも話し合いによって、解決を進めていくつもりだ。

どうにか新聞すべてが私たち貧しい被害者を暖かく励まし、見守っていてほしい。今日私たちがあるのは、ある意味では新聞のおかげだと思つ。今後ともその正しい姿勢を貫き通してほしい。二重と私たちのような悲しい犠牲者を出さないために――。